



日本文学

長部日出雄と津軽の文学風土



講師：札幌国際大学人文学部国際教養学科教授 武井昭也先生

昨年の「日本の文学」講座は「津軽の文学風土」と「北海道の文学風土」の2部構成による開講でした。

さて、今回は、講師の出身地「津軽」の文学者 長部日出雄の視点を軸に展開されました。名立たる津軽出身作家 太宰治や、版画家 棟方志功といった文化人を研究した長部氏。作品に息づく「津軽」の風土を感じる、独自の文学講座の開講でした。

受講後のアンケートからも印象深い作品として名前が上げられたのは、講師が朗読した長部日出雄の ※『津軽世去れ節』（1972年）。「嘉瀬の桃」と呼ばれた津軽三味線に合わせて民謡を歌う津軽の歌い手の話です。

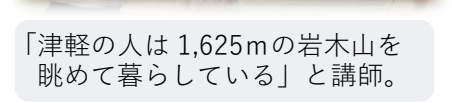
一見、小説とはわからない、書き出しがルポライターのようで、津軽の風習や慣習が読者にも馴染むように表現されています。物語の迫力にいつしか引き込まれ、津軽の人々の動きを眺めるような感覚に。

このように作品の持つ力を使って、津軽の風土を受講者に感じさせる講師の解説があり講座が展開されていきました。

※『津軽世去れ節』（1972年著）。『津軽じょんから節』（1973年）と合わせて直木賞を受賞。津軽出身者である（長部日出雄）だからこそ書けた作品との評。



岩木山(弘前葛原から 2025年5月撮影)
* 講師撮影写真



「津軽の人は、1,625mの岩木山を眺めて暮らしている」と講師。

いくつかの文学作品や津軽出身者の映像を通して「津軽」を感じる講座となりましたが、受講後アンケートからの感想を一部記します。（許可をいただいた方のみ掲載しています。）

- ・ 今まで知らなかった「もも」（『津軽世去れ節』『嘉瀬の桃』の章（1972年・長部日出雄著）の話は興味深かった。
- ・ 長部日出雄氏が弘前出身の作家であることは知っていましたが、作品を読んだことがありませんでした。この講座が彼を知る良い機会と思ったと同時に、武井講師が同じ弘前出身であることも興味深く参加させて頂きました。私にとって長部作品の入口になる貴重な講座でした。有り難うございました。
- ・ 6日の講座の余韻にまだまだ浸っております。長部日出雄の分析の温かさ、優しさ、鋭さにいちいち頷いてしまいます。読んだつもりの「津軽」が、観たつもりの「棟方の版画」が、別な力を持って私の中に居座ろうとしています。興味深いテーマで深掘りの愉しさでした。本日の『道新』【卓上四季】の文中、安野光雅の言葉として「本を読むことは自分の考え方を育てることだ」とありました。納得です！
- ・ 津軽地方の作家は太宰治、石坂洋次郎、寺山修司、画家の棟方志功くらいしか知識がなく、長部日出雄を初めて知りました。直木賞を『津軽じょんから節』、『津軽世去れ節』で受賞し、授業で三味線弾きを描いた『世去れ節』は津軽地方独特の感性が溢れている作品。またエッセイで石坂洋次郎、棟方志功を語った文面に興味深く読みました。
- ・ 長部日出雄はきっと先輩の作家・太宰治のことを書くな……とと思っていましたが、『桜桃とキリスト』のような作品を書いたのですね。知らない著書もあり興味が増しました。
- ・ 黒石出身です。今日は私にとって大変有意義な時間を頂き有り難うございました。（青森県黒石市出身の方）

配布資料として、JR改札口にある無料の観光ガイドパンフレット『あおり紀行』もお持ち帰りいただきました。

この夏は青森津軽に……行きますか！

